

1. 『ウイズ生成 AI の時代を生きる』を読んで

ChatGPT が社会を一気に変えたという驚きが読み取れた。2 年ほど前までは ChatGPT の使用に対して、なんとなく嫌悪感のようなものを持つ人々が多かったが、最近はそれが薄れてきているようにも感じる。同時に、ユーザーが質問すると「それらしい回答」が瞬時に生成されることを問題意識として捉えており、「専門家の役割の変化」という不安にも近い視点が読み取れる。先ほど述べた嫌悪感はこのような部分に対してだろう。今回は農業農村地域を対象にした質問がされていたが、限定しないと一般論しか返さないということが述べられている。「適切なプロンプト設計ができなければ、有用性が大きく下がる」という指摘である。また、展望記事は、専門家の仕事から AI に置き換わる可能性を意識しており、「AI に置き換えられない人間の価値は何か」という問題を提示している。私たちは AI が流通するこの時代に何をするべきなのかという問い合わせに対して、いくつかの意見が述べられているが、そのうちの『知識の取りまとめは AI に任せる』という点について、私もレポートや課題の作成などで情報が必要なときによく AI に聞き、情報を集めてもらっている。また、『AI による解答の真偽をチェックする』という点についてもその通りであると考える。自分が求めている情報が、意図した通りに返ってくることはあまりないと感じる。AI とは基本的に文字でのコミュニケーションとなるため、自身が考えていることを正確に表すことができないと欲しい情報は得られない。質問の仕方や情報整理の方法といった、使用する側の工夫が重要である。我々は AI を受け身で利用するだけではなく、AI を適切に使いこなし、精度の高い回答を引き出すための工夫が必要であると考える。AI が登場し、改めて人と人が対面して行うコミュニケーションの大切さや尊さを感じた。文字だけでなく、表情やジェスチャー、言葉のイントネーションから読み取れる相手の思考や感情がコミュニケーションにおいて非常に大きな意味をなしていたことを感じ、家族や友達、教授とのコミュニケーションをこれまで以上に丁寧にしていこうと考えた。

質問として、以下のことが気になった。

- ①知識整理は AI、判断・倫理・一次データ創出は人間とのことだが、具体的にこれから専門家の立ち位置、価値はどのようなところにあるのか。
- ②これから農村地域のインフラ整備にも AI が使用されていくだろうが、それによって都

市と農村の格差が拡大していかないのか。

③農業農村地域のデータインフラ整備において、コストが大きいものを自治体・国・農家のどこが負担し、維持していくか。

2. 『クリスマスイブの霜柱』を読んで

農学部に入るも、講義内容が「理想論」に感じられ、現実との乖離に違和感を抱いていることが読み取れる。実家が農家であるからこそ、表面的な理想像に強い疑問を抱いたという背景が見える。『どうせ理想論で終わるなら、いっそのこと一番現実離れしたものをしてやれ』ということで土壤物理学を選んだと書かれているが、開き直って選択した分野がむしろ深い現実へとつながる入り口だった点が非常に興味深く、人生は予想できないものだと感じた。また、実験で霜柱を観測できたのは想定外であったが、それがきっかけで研究人生が大きく動き出すという点から、計画された研究より、偶然の観察が本質的な問いを生むこともあるという哲学的なものを読み取った。そこからの研究で、震災後の塩害や除染の問題など、現実的で社会的意味を持つ学問であったという点も、やはり取り組んでみないとわからない視点があるということを感じた。私の実家は農家ではなく、講義内容に関しては新たな知識として受け取っていたが、現場を知る人からすると「理想論」に感じられる部分があるのだということは、新鮮な気づきとなった。私の周りでは、実家が農家ではない農学部出身者も多く、これから先は現場レベルでの技術や知識を重宝し、今後も守っていく必要があると考えた。

質問として、以下のことが気になった

- ①この話は、霜柱が研究者としての道を見つけてくれたとの内容だったが、予期せぬ状況が研究を決定づけることはどの学問でも起こり得るものだと考えるか。
- ②霜柱を発見した瞬間から、土の凍結現象という研究テーマに結びつくまでの思考プロセスはどんなものだったのか。
- ③大学の講義内容に感じていた「理想論」について、現在はどう感じているのか。
- ④農学の中でも、細かい分野ごとにどのくらい「理想論」を語っているかに差はあるのか。あるならば、「理想論」であると感じる分野と、そうでない分野はそれぞれどの分野なのか。